

よみがえる命が宿るところ

— 古代エジプトのミイラと増殖する技術 —



随筆

豊田 政男*

黄金色に燦然と輝くツタンカーメン王のマスク。ルクソールの西岸、紀元前1567年に始まる第18王朝以降の王家の墓が並ぶ、通称王家の谷と呼ばれるところから、イギリス人のH.カーターによって発見された王のミイラのマスクである。現在は門外不出と聞かすが、時期の記憶が定かでないものの我が国で一度公開され見に行ったことがある。ミイラはピラミッドと切り放すことの出来ない古代エジプトの特記されるべきものである。このミイラは死後に「バア」という魂が帰るところがあるように「造られた」として説明されている。しかし、砂漠に直接埋められていた時には腐ることがなく、わざわざミイラ処理する必要がなかったのであるが、大事に棺に入れ保存しようとし出したために腐るようになり、ミイラ化が施されるようになったという。エジプトの博物館では古代エジプトの多くのミイラの部屋は閉鎖中であるが、大英博物館などには、いくつかのミイラが並べられ、訪れた人がお目当てにしているし、また子どもが学校教育のために団体で来るためいつも込み合っている。また、ローマのバッキンガム美術館でもリアルなものをゆっくりと見たことがある。

ミイラと来世観

ミイラという言葉は、アラビア語の「ムミヤ」から来ている。ムミヤとはアスファルトのこと



* Masao TOYODA
1944年4月30日生
1967年大阪大学工学部、溶接工学科卒業
現在、大阪大学工学部、生産加工工学科、教授、工学博士、溶接構造強度学、インターフェイスメカニクス TEL 06-879-7559

で、樹脂のために真っ黒になるミイラが多かったためにそう呼ばれたという。中世ヨーロッパではミイラを粉にして薬として飲んだそうだ。

一般的なミイラは、死後ミイラ職人がミイラ化処理をする。その処理工程は百日近くの作業で、死体から内蔵を摘出し、天然の炭酸ソーダの結晶で覆って約40日間完全に乾燥し、その後何百メートルもの防腐剤にひたした亜麻布の包帯で丹念に巻く。それを人型の木棺に入れる。当初は木棺でなく顔だけを被ったが、中王国以降に完全な棺になった。更にそれを人型の外側の木棺に入れる。これは丸太をくり抜いたもので、外側には金箔が施され、通常ハゲワシの羽の模様が描かれた。ツタンカーメン王のものは、この棺が黄金張りなのである。

ミイラは古代エジプト人が死後の第二の生活を始めるために不可欠のものなのである。古代は全宇宙に存在するもの全てが生命を持ち、太陽も朝に生まれ、夕には死んでいくという、一日が一生だったわけで、死後の世界の神オシリ

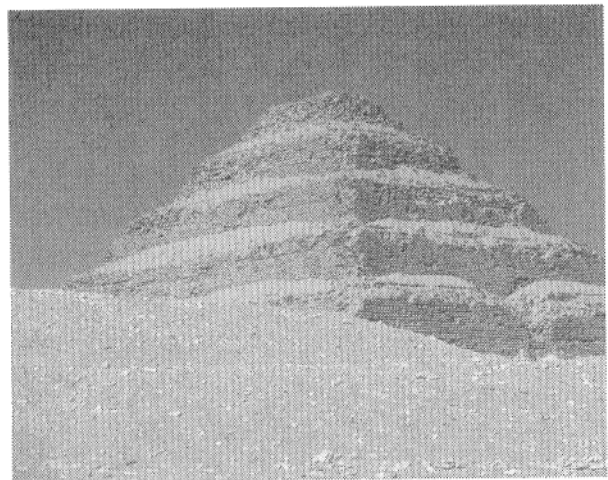


写真1 エジプト最初のジョセル王の階段ピラミッド (サッカラにて筆者撮影)

スは日の沈む西側にすむということで、ピラミッドや墓はナイルの西岸につくられた。人々は、王とは違って死後は神になれるわけではないので、来世で永遠の幸福を得ることを願って、せめて神々のすむ死者の町の西岸に住みたいと願ったという。

古代エジプトの最後の審判

最後の審判といえば、キリストの審判を描いたミケランジェロのシスティーナ礼拝堂の祭壇のある西壁の「最後の審判」の天井画が思い浮かべられる。「最後の審判」は、1536年60歳になってから描き始めたもので、1541年10月31日に序幕が行われた。中央にキリストが描かれ、周囲の人間達は無力で、筋肉たくましい神の身ぶりに恐れおののいている。この周囲の神々の腰布については本来なかったとして議論になったものである。ミケランジェロは自らの顔を神にぶら下げられた皮だけの恐ろしい感じの姿に描き、また、右下の神には蛇が性器にかみつくなどリアリステックなものとなっている。仏教の宇宙観でも我々の住む世界の地下に地獄があり、死後天界と地獄のどちらに行くかは閻魔大王が審判すると教えられ、子どもの頃街角にあったお地蔵さんに掛けてあった地獄絵の恐ろしかったことを覚えている。

古代エジプトで、この最後の審判を行うのが、冥界の王オシリス神なのである。オシリスは地の神ゲブと天の神ヌートの間に生まれ、全エジプトを治めることを許され善政を行ったが、彼

を妬んだ弟セトに殺される。その後、妻イシス神の力で復活したが、現世では生きられず冥界の王となったのである。死者復活信仰の対象であり、オシリス神話として広く信仰された。このオシリス神話は、第三王朝のジョセル王の時代に既に信仰されており、ジョセル王がそれに従って王墓の建造を命じたのが、イムホテプという石を切り出して構築物に使った最初の建築家である。イムホテプは、BC3100年頃から死者を地下の深いところに埋葬し地上にマスタバと呼ばれる日干し煉瓦の蒲鉾型の墓塚をつくっていたものからピラミッド型の大型墓塚に変えたのである。その最古のピラミッドは、サッカラに残る階段ピラミッドである。巨大石造構築物時代の幕開けである。

古代エジプトの神々

古代エジプトにはいろいろな神々がいた。古代エジプトの最初の神といわれるのが、アトウムである。アトウムの神は、下エジプトの王のシンボルであるパピルスの花が開花した形の赤と上エジプトの王のシンボルである蓮の花の形の白の複合王冠をつけた人物像として描かれる。自然発生した神で、シュウ（大気の神）とテフネト（湿気の神）の兄妹を創造し、この二人が結婚して、大地の神ゲブと天空の女神ヌートを生んだという。ヌートは身体が天空を形作り、朝太陽を生み、夕に太陽を飲み込むとされた。どこの地方でも、神話の内容はかなり類似性があり、我が国の国生み神話にもよく似た話がで

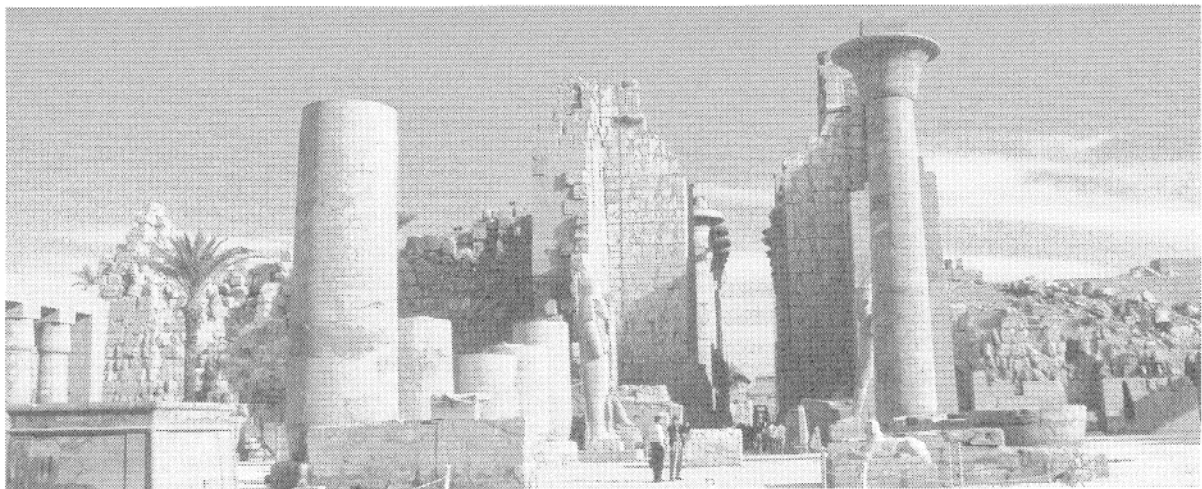


写真2 広大な敷地に建造されていた世界最大規模のカルナック神殿の石造構築物。(ルクソールにて筆者撮影)

生産と技術

てくる。人々にとって、太陽、すなわち昼と夜の区別、さらには夜空に動く星などは興味と驚異の対象となった。このように古代エジプトではオシリス神話のみが信仰されたわけでない。

ナイルの洪水と神と神殿建設

古代エジプトでは、七は神聖な数字であり、七つの星、すなわち太陽、月、土星、火星、水星、金星、木星の七つがあがめられ、またそれにシリウスを加えた八つの星は特別視されていた。シリウスは、冬の星で夏には太陽と同じように昇り沈むために見えない。エジプトではナイルの増水が六月中旬頃から始まるので、シリウスが日の出の直前にでる時期は洪水などと密接に関係するため、イシス神の化身としてイシス星と名付けたのである。

古代エジプトは生産、生活を大きくナイルに依存していたため、ナイルをめぐる神話も多い。ナイルの水を調節する神がクヌム神である。最初にピラミッドをつくったというジャセル王の時代、ナイルが七年間も氾濫せずに飢饉が続いた。そこでクヌムの神に生け贄と供物を捧げて祈禱したところ、クヌム神が神殿を建てて荒廃した祭壇を復興せよとのお告げがあり、その命に従ったところ再び肥沃になったという話が、飢饉碑板に残っているという。このクヌム神と

王の中を取り持ったのがイムホテプという話もある。これなどは土建屋さんがうまく自分の工事量が増えるような天の声を導き出す方法と同じような気がするが、それは考え過ぎか。

増殖する技術

古代エジプトに限らず、当初は信仰などと密接に結びついた形で大型事業が行われ、必然的に画期的な技術が生まれる。更にその技術がいろいろな波及効果をもたらし、相乗的な技術展開へとつながる。

製造業に関していろいろと難しい議論のある今日の我が国において、今後求められるのは、増殖的な新しい産業であり、そこで生まれる新しい技術であろう。このような展開において、必ず問題となるのが従来技術を主とする産業分野のことである。短絡的に従来技術を否定するものでなく、当然ながら従来技術・産業分野は、我が国の多くを支える重要な地位が急速に変わるわけがない。大事なことは、両者のウエートの置き方、一つを一方向的に否定しないことである。二極化する道を歩むか、融合しなだらかな遷移の道を歩むかは、これからの重要な選択である。しかし、判断に残された時間は長くはない。

